

イルカ

JOSHIBI no.200



イルカ（いるか）

シンガーソングライター／絵本作家。女子美術短期大学造形科生活デザイン教室卒業。在学中にフォークグループを結成、71年シューリックスを経て、74年ソロデビュー。75年「なごり雪」が大ヒット。50周年を迎えた現在も毎年全国ツアーを続けている。絵本「ちいさな空」全4巻、「真冬の天使」「まあいいのち」やエッセイも出版。2004年にはIUCN（国際自然保護連合）親善大使就任。2010年より女子美術大学 芸術学部客員教授。



創ることは、呼吸を
するのと同じ。
だから、やめられ
ないんです。

日本を代表するシンガーソングライターであるイルカさん。
音楽をはじめ、絵本、エッセイ、アートとそのフィールドは広く、
近年は「生物多様性」をテーマにした着物のデザインや手描き・
染め、SNSでの発信、ボカロPとして実孫との活動もス
タート。「命が尽きる直前まで表現していきたい」と語る彼女の
原点はジョン・レノンと女子美にありました。

Photo 吉濱麗志 Text 株式会社フリッジ



父がジャズマンでしたから、子どもの頃から音楽は身近でした。主婦だった母も音楽が好き。ジャズだけでなくアメリカンポップスとかいろんな音楽がずっと流れている家庭だったのです。私は1950年代くらいの古い音楽が気に入りの、ちよっとおませで内気な子どもでした。

音楽は日常生活に溶け込んでいつも私の側にあったのですが、絵も同じです。曲をつくったら、その曲のイメージの絵を描くのがお決まりでした。今でも曲のアレンジやレコーディングのときに自分のイメージを伝えるのに色彩で表現することがあります。「Aメロは色でいうとブルー。ずっとグラデーションでこんな風に」といった感じで。絵を描いているとメロディが浮かんできますし、音楽と絵は相互に補完し合っている。切り離せない存在なのです。

私の世代を語るときに外すことができないのはやっぱりビートルズ。中学1

年のときに出会って、特にジョン・レノンの大ファンになりました。彼は今までの歌手やスターと違う空気をまとっていました。自分たちの手で、音楽以外にもいろいろなものを創っていく。「ロックスターだからといって、何も表現するのは音楽に限らなくていい。エッセイを書いてもいいし、そこに絵を描いてもいい。自由でいいんだ」といった彼の言葉に、中1の女の子だった私は大きな衝撃を受けたものです。

音楽が好き、絵も好き、動物も好き、あれも好きと、当時から私には好きなものがたくさんあって、自分のなかでは収拾がつかなかった。でもジョン・レノンの発言に触れたことで「全部つなげてやってたていいんだ」という発想に変わったのです。

そうになると、当時通っていた中高一貫校から系列の短大へという

既定路線に疑問をもつようになり、近くにあった女子美が気になり始めたのです。でも「違う学校に行きたい」の一言がなかなか言い出せなかった。内気な子だったんです、本当に。自分がやりたいと思うことをやらなきゃいけないと覚悟を決め、初めて母に自分の気持ちを伝えられたのは高3の夏でした。

そこからドタバタと受験の情報を集め、勉強を始めたんです。近所に美大生たちが集まるアトリエのような一軒家があつて、そこのお兄さんお姉さんたちが自分の制作をしている傍らで、私はずっとデッサンをしていました。制作の合間にアドバイスをくれる美大生のなかには女子美の人もいたのですが、すごく親しみやすく、優しくて。彼女との出会いもあつて、女子美に行きたい気持ちはグッと高まりました。

「ものを創る人間は、心が自由でなくてはいけない」。これは女子美の入学式で当時の学長がおっしゃった言葉です。それを聞いて「それです！」って叫びそうになりました。「私はそれを求めてここに来たのです！」って。それだけでも女子美に来てよかったと思えるほどです。その言葉は、今でも私の根底に息づいています。

女子美を選んでいなければ、今とは違う人生だったでしょう。女子美のフォークソング同好会のポスターを見つけたときからイルカとしての人生は始まったといえます。同好会のコーチとして早稲田大学のフォークソング倶楽部から来ていたのが、後に私の人生のパートナーであり、プロデューサーとなる夫でした。イルカという名前がついたのも同好会がきっかけです。サークルの帰り道、後ろの方を歩いていたら、みんなが持って

いるギターケースが揺れていたの「イルカの大群が泳いでいるみたいに见えない？」って私が言ったら、「本当だ」ってみんなが笑ってね。その日から私の呼び名はイルカになっちゃった。先生たちからもイルカって呼ばれていました。

女子美で過ごした時間はもう最高に楽しかった。学校に行くのが嬉しくてね。もちろん、制作することはとても大変なだけでなく、厳しさのなかには仲間と切磋琢磨する楽しさもあるし、先生たちはたくさん情熱を注いでくれる。とにかく充実していました。なにより、何も説明しなくてもわかり合える仲間ができたのは財産です。女子美で出会った友達にはいまだにずっと付き合いが続いている人もいます。会うともう昔のまんま。私、あの美術展に行ってきたんだよなんて話すと、みんな同じのに行っていたりね。



何十年も会ってなかった時期があるのに、不思議でしょ。2010年からは芸術学部の客員教授という形で女子美に関わらせていただいていて、心から嬉しいことだと思っています。

私はずっと心のままに、自由にやりたいことをやってきました。生命や自然、地球に関する作品もたくさんつくってきました。そんな私に2004年、IUCN国際自然保護連合の親善大使のお話がきました。幼い頃はおとなしくて、いつも蟻ん子と遊んでいたような私です。人間が小さな生き物の命を粗末にすることには常に憤りがありました。将来は野生生物に関する仕事をしたいと思っていた時期もあったはずです。だから親善大使の役目は光栄だけれど「私には何もできません」とお伝えしたら「音楽や絵本を通じて、一般の人と自然界、学者

をつなげてください」と言う。それならばとお引き受けすることになりました。

大きな国際会議では世界から1万人くらい学者が集まるのですが、私がつくったIUCNの歌を英語で歌うと、わーっと盛り上がるのです。そのときには必ず、自分で描いた着物を着ていきます。トキがいたり、ジュゴンがいたり、絶滅危惧種の生き物たちを描いています。線描き、染め、色の調合、絵もすべて自分で手がけています。それを着て、地球上の生き物たちとの架け橋になれることを願いながら歌うのです。ちなみに、いま私が一番大切にしている言葉は「あいのたね♥まこう!」なんです。なぜなら、現実の世界があまりにも厳しいから。災害、戦争、ウイルス、環境汚染、犯罪。そんなニュースばかりで不安が蔓延しています。そんな時代だけ

からこそ、未来を担う子どもや若い人たちのために、愛の種を一粒でも多く蒔いていきたい。

私にとって表現は呼吸をするのと同じこと。生きていることとセツトで、やめることはありません。墨絵、文字、油絵、まだまだ挑戦したいこともたくさんあります。タブレットで絵を描くのもいいし、SNSでの発信も面白い。実孫や孫世代のクリエイターと仕事することで「またいろいろな光が差してきたな」と日々感じています。

一昨年、母を看取ったのですが亡くなる2時間前まで会話ができました。「心にあるものは最期までなくならない」「命が尽きる直前まで表現できる」と、この経験からよくわかったのです。これからも私は心と体を大切にしながら、創作に情熱を注ぎたい。最期のときが来るまで続けたい。今は改めてそんな風に感じています。



「イルカ アーカイブ Vol.9 ESSAY/けさらんばさらん/Delfina」



「うたのこども」



「まあるい いのち -アエルのふしぎな冒険-」 小学館



11月25日「宇宙・人間・アート」講演の様子

本学芸術学部アート・デザイン表現学科による公開講座「宇宙・人間・アート」(→P20)の第7週ゲストとして登壇。IUCN(国際自然保護連合)親善大使としての活動紹介、音楽観賞、絵本読み聞かせの他、イルカさんが描いたイラストを家族で缶バッジにしてグッズ化したエピソード、イラストと共に書かれている「あいのたね♥まこう!」への想いを語られました。また、お孫さんのために手描きで制作された振袖を実際に見せていただきながら、制作過程や模様のエピソードをお話いただきました。



Q 5

制作する上で大切にしていることを教えてください。

やると決めたら全身全霊で臨みます。そして誰かが好きなものという以前に自分がどれだけ制作過程でワクワクできるかは毎回物を作るとき大切な基本のパロメーターです。このような精神を亡き柚木沙弥郎先生(女子美術大学元学長で工芸科教授)がご自身の著書で語られていたのを知り、大変嬉しく思いました。これは物を作る人にとっての共通の精神ではないかと思いました。直感のようなその思いを持ち続けることが、次の物作りにつながると信じています。迷った時はある程度時間を置いて客観視もできるようにして、ある時これだ!と思った時にまた突き詰めていきます。



ame black side 2023年

Q 6

海外で活動することの楽しさとは?

織というものは地味な作業ですが、にもかわらずそれを通して国境や文化の壁を越え、さまざまな国の人と直接コミュニケーションが取れ、手触えを直接感じられることだと思えます。そして他国の文化を知る機会に恵まれると同時に、日本の良さも実感します。責任も大きいですがNYにいて世界が遠い存在ではなくなったように感じます。そして、ふと自分の作ったものが世界の人の手に渡りそこに存在しているという事実が自分にとって脅威であり、これほど嬉しいことはありません。



Q 7

大学時代にやっておくべきことについてアドバイスをお願いします。

学校という媒体は最大限に利用すべきです。学校ではいろいろな機会が自動的に与えられ、多くの出会いもあるでしょう。それをどう生かすかは本人次第です。興味のあるものはどんどん追求すべきだし、課題はやるからには全力で取り組みましょう。自分の好きなものだけを作れる時間はなんて素晴らしいのでしょうか。自分らしさを大切に最大限に活用してください。

Q 8

やりたいこと、夢を実現するためのヒントを教えてください。

自分は何が好きか、何を表現したいのか? 自分に正直に、興味のあることはなんでも試してみると良いのでは? 回り道と考えることも後になって必要な経験だったと思うことがあるでしょう。理想の自分に辿り着くためにはどうしたら良いのか? 現実的に計画を立てるのも良いと思います。五感研ぎ澄まして暮らしましょう。

Q 9

女子美生にメッセージをお願いします。

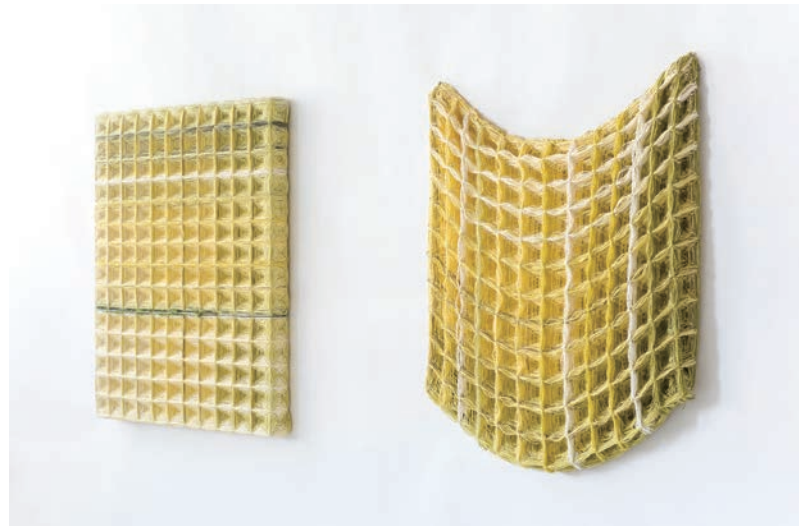
私もいまだに試行錯誤中ですが、どんなプロフェッショナルな分野にいても結局は人間性や人間としての生き方が最も大切なことではないかと思えます。そして一つ一つの出会いやつながりが、人生をさらに実りの大きいものにするとおもいます。



武田 裕子(たけだ・ひろこ)
テキスタイルアーティスト・デザイナー。NY在住。1991年に女子美術大学芸術学部産業デザイン科工芸専攻卒業後、株式会社川島織物を経て1999年渡英。2001年、ロンドン Royal College of Art 卒業。同年に渡米、テキスタイル界の巨匠 NYのジャックラーセン氏のスタジオに加わる。2009年に独立し、Hiroko Takeda Studioを設立。現在、NYに拠点をインターナショナルに活動中。

武田 裕子

NEW YORK



Yellowbird diptych 2019年



Social Fabric & Gathering IV at Colony 2019年

Q 1

海外で活動するようになったきっかけは?

大学卒業後、日本の大手企業にテキスタイルデザイナーとして勤務し、ある程度仕事は認められていたものの、どこか物足りなさを感じていました。そんななか、海外出張などで見かける世界の布のユニークさや表現の豊かさを見るたびに、いつか自分もそんな布が作れたらと思い始めました。そして機が熟し、ロンドンのRCA(大学院)に進学を決めました。在学中のコンペがきっかけで卒業後、NYのJack Larsen Studioに加わり、念願だった世界のテキスタイルの産地と仕事をする機会を得ました。現在は独立しましたが、私にとっては今までの経験を生かしながら世界中の人と仕事ができる、現在のNYでの環境が活動しやすいと感じています。

Q 2

女子美に進学した理由は?

子供の頃から布が好きでした。しかし、どの学校がどんなテキスタイルの教育をしているのかなど深く調べずに、漠然と良いといわれる美術大学でテキスタイルを勉強しようと受験に臨みました。結果、希望していた学校には不合格で、合格した女子美に入学しました。しかし、これが私にとってのラッキーな運命で、結局女子美の工芸科で学んだことが現在の私のテキスタイルの知識の大切な基盤となり宝となっています。行きたいと思っていた学校ではこのようなテキスタイルは教えていないことを、あとで知りました。

Q 3

女子美時代はどんな学生でしたか?

自分の好きなものを、授業で学んだ手法で素直に表現しようとしていましたが、後にいろいろな方から聞くところによると、規則に縛られない自由奔放で我が道を行く学生に見えたそうです。自覚はありません。ただ、工芸科の中に閉じこもるというよりも、違う学科や違う学年のユニークな友人がたくさんいて、その人達との交流からも刺激を受けていたことを覚えています。

Q 4

女子美時代の、特に印象深い思い出は?

一つ一つの課題すべてにやりがいがあった楽しかったことを覚えています。当時の女子美の工芸科は日本民芸運動の流れを汲んだ染織を教える独特の学科で、それを学ぶことができたあの4年間は貴重な時間でした。1年生として入学した途端から素晴らしい教育を受けていたのだと、海外で生活するようになってさらに実感しています。

企業で働く、 そんな未来。

Vol.06



デザインセンターの同僚でもある
ご夫君が製作に携わった
トラック「ELF」とともに。

女子美で自由に のびのび学べたから いつでも、どこでも、 自分らしくいられる！



いすゞ自動車株式会社
デザインセンター
プロダクト&CMFグループ
林千鶴さん
芸術学部 デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻
2015年3月卒業

いすゞ自動車株式会社

1916(大正5)年創業。「地球の『運ぶ』を創造する」を使命として、トラック、バス、ピックアップトラック、産業用ディーゼルエンジンなど、さまざまな製品を通じて「みんなの運ぶ＝生活」に寄り添い、社会を支え続けています。
<https://www.isuzu.co.jp>



転勤族の家庭で育ち、転校が多かったことからなかなか学校に馴染めなかった幼少時代。いよいよ高校受験！という時に「好きなことならやれるかも？」と、好きだった絵を生かして仕事にもつながりそうな工業高校のデザイン科に進学しました。製図やグラフィックデザイン、プロダクトデザイン、平面から立体までいろいろなことを学ぶうち「デザインって面白いな」と思い始めました。周りが就職活動をするなかで、デザインを学べる大学をめざし女子美のプロダクトデザイン専攻に進みました。

自分の意思を持つ
大切さを学んだ大学時代

社会で即戦力になるためのいわば職人的な学びが中心だった高校時代。一方、女子美では「自分が何かを作り出す側」になるためのクリエイティブティのある学びが中心でした。「こんなに自由でいいんだ！」と驚きつつも、だからこそ自分の意思や軸を持つことが大切であることを学んでいきました。課題では、高校時代にたたき込まれた「締め切り厳守」の職人魂も生かしつつ、クオリティとスピードを意識して取り組んでいました。高校と大学、両方の学びの良さがうまく融合できたと感じています。

工業高校から女子美へ

業界を知るために行ったインターン

就職活動を始めたのは大学3年の秋頃でした。絶対この業界！というのはありませんでしたが、ものづくりそのものにしつかりと携われそうなメーカーがいいなとは思っていました。そんな時、キャリア支援センターで自動車業界のインターンがあることを知り、説明会に参加。車好きなわけではなく、運転免許もなし、課題で車のデザインを経験したこともありませんでした。でも、そもそもの業界のこともわからないので、深く考えずインターンに行けば何かがあるはずと思ったのです。なので、スケジュールが早い順に、自動車、家電、玩具、ゲーム、家具、雑貨系と順番に受けていく予定でした。そして初めて参加したのが、いすゞ自動車のインターン。5日間、会社施設に宿泊して行うデザイン実習でしたが、これが選考だったことに参加しながら気づきました。翌週には別の自動車メーカーのインターンにも参加しましたが、結果的にいすゞから最初に連絡をいただき、私の就職活動はあっけなく終わりました。

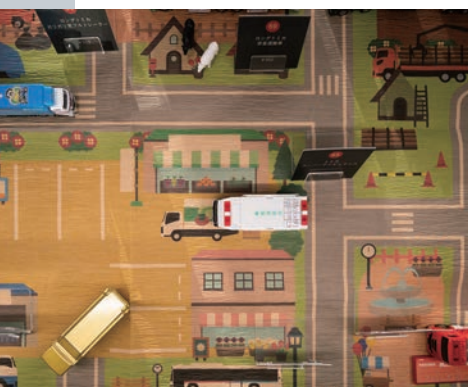
女子美時代に「個」を確立できたこと

こうして入社したいいすゞ自動車。女子美とはまったく違う、思いきり男性中心の職場です。初めは環境変化に戸惑いましたが、自分を見失わずにいられたのは女子美時代に「個」を確立できていたからだと思います。女子美では自分

の性別を気にする場面はなく、女性もただの人間でした。ただの人間として、のびのびデザインを学び過ごせたこと。何かに萎縮することもなく、自分らしくありのままにいられたあの環境の素晴らしさを、改めて実感しています。

幅広いデザインができる環境

所属するデザインセンターでは、内装の小さな部品から、大型トラックの外装、UIデザイン、CMFといった量産業務のほかにも、コンセプトカーのイメージムービー絵本、広報や社会貢献活動で使用する子ども向けコンテンツのイラスト、玩具など、プロダクトからグラフィックまで幅広いデザイン業務に携わっています。デザイナーもほとんどが男性なので、女性や子供向けのデザインは、喜んで私が担当しています。プライベートでは幼い娘がいるので、子供向けのデザインができるのは嬉しいですね。また、視野を広げるために、他業界のインハウスデザイナーが集まる社外活動に参加するなど、自己研鑽にも励んでいます。



林さんがデザインを手がけた、ミニカーで遊べるレジャーシート

採用担当者の声

自分自身を素直に
表現できるマインドを。

いすゞ自動車株式会社
デザインセンター プロダクト&ストラテジーグループ
平田 順 さん

当社のデザインセンターは、単なるスタイリングに留まらず、真の機能美を兼ね備えたプロダクトを社会に提供していくことを使命としています。歴史のある部署でありながら、その歴史に囚われることなく、ワーキング活動など創造性を刺激する新しい活動を積極的に展開し、クリエイティブかつ和やかな雰囲気なかで幅広いデザイン業務ができることが特色の一つです。クリエイティブな作業が好きな人、ご自身を素直に表現できるマインドや自然なコミュニケーション力を持った方。これからのいすゞ自動車を一緒に創造していける、魅力あふれる皆さんとの出会いを楽しみにしています。

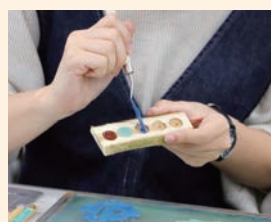
女子美生のありのままが強みになる

そんなデザインの仕事の傍ら、リクルートにも携わっています。多くの学生のポートフォリオを見る機会もありますが、そこで「デザイナーはポートフォリオのどこを見ているのか？」についてわかったのが、必ずしも車ばかりのポートフォリオが選ばれているわけではない、ということです。自動車メーカーが見ているのは今だけではありません。何十年も先の未来も見据えています。だからこそ、既存の「車っぽい形」を描けることよりも、発想の幅を大切にしているのだと、入社してから気づきました。私自身、免許こそ取りましたが運転が怖くてペーパードライバーです(笑)。で

も、そんな人の視点も自動車メーカーには必要なものだと思っています。リクルートで女子美を訪れるたび、あの懐かしい、女子美らしいのんびりした雰囲気を感じています。だから、人によっては他大学と混じって就活の場に出た時に萎縮したり、急に競争にあてられて苦しくなったりすることがあるかもしれません。そんな時にも「自分は自分だもん」と聞き直れる子は強い。いい意味でガラガラしていない、ありのままの女子美生の姿勢は、きっと強みになります。就活は苦しいけれど、通れば嬉しい、ダメなら次へくらの心持ちで臆せず今の自分であつちみてくださ。そして、乗り越えた先に、もしかしたらいすゞ自動車でお会いできれば嬉しいです。

女子美祭 ワークショップ

相模原キャンパスでは、小中高生を対象としたモノ作りが体験できるワークショップを実施しました。女子美祭期間中、相模原キャンパスの女子美アートミュージアム(JAM)では、造形「さがみ風っ子展」が開催されています。さがみ風っ子展は、令和6年度で44回目を迎える、小・中学校の児童生徒の図工・美術作品約18,000点が市内3カ所の会場に展示される大規模展示。本学も2003年から会場の一つとなっており、本年より地域の子もたちと大学との交流を増やすことで大学として地域に貢献したいという主旨のもと、各専攻企画による多数のワークショップを開催しました。本学の建学の精神「専門の技術家・美術教師の養成」をふまえ、学生にアートを介したコミュニケーション力を培うことも目的として、当日は学生がスタッフとして指導にあたり、たくさんの来場者楽しんでいただくことができました。



女子美祭 2024

10月25日〜27日の3日間、杉並・相模原両キャンパスにて『女子美祭2024』が開催されました。コロナ禍前のようにのびのびと開催できた今年度の女子美祭。杉並キャンパスは「CIRCUS!」、相模原キャンパスは「舞踏会」をテーマに在学生の作品展示、自主展示、ステージ発表、有志によるハンドメイドのグッズ販売を行いました。また、卒業生が手掛けたキャラクターが多く描かれているサンリオカフェワゴンによる

軽食販売を実施。本学卒業生が手掛けたキャラクター「ハローキティ」はなまるおぼけも杉並キャンパスに遊びにきてくれました。ゲスト講演会では杉並キャンパスでは俳優の松島勇之介さんが来校。相模原キャンパスではオダウエダさん、春とヒコキさんによるミニお笑いライブ、声優の小林裕介さんによるトークショーが開催され、好評を博しました。学生のみならず、多くの来場者が訪れ、キャンパスが賑わいを見せました。

ポスターデザイン
杉並キャンパス「CIRCUS!」:芸術学部アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域 3年 生田菜々美さん
相模原キャンパス「舞踏会」:芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻 3年 氏江桃子さん

ドローイングセンターの取り組み



ドローイングセンター
WEBサイト

女子美術大学では、『描く行為』に特化した専門的な技術と知識を多角的に研究し、実践的に社会に還元するための施設として相模原キャンパスにドローイング

センターを設置しています。本センターでは、授業の空き時間や放課後の時間を使って、自由にデッサン力を鍛えることができるほか、モデルのクロッキー会や企

業講師を招いてのハイブリッドドローイング演習も企画しています。ここでは2024年度のドローイングセンターの取り組みをピックアップしてご紹介します。

ハイブリッドドローイング演習 コスメティック ドローイング講習会



6月6日、株式会社モーニングターによるコスメティックドローイング講習会が行われました。株式会社モーニングターは、化粧品を絵の具に変える発明をし、化粧品とアートを融合させたブランド「SminkArt（スミンクアート）」を立ち上げており、役目を終えた化粧品から新しい価値や楽しみを生み出しています。本講習会では、株式会社モーニングターの活動をご紹介いただき、実際に化粧品絵の具化溶液「magic water」を用いて、使用しなくなったコスメで絵を描きました。廃棄されるコスメを「資源」として捉えなおし、新しいものを生み出す視点、（絵具、雑貨色材、印刷インク、アクリル、建築材料などの）様々な色材に展開する多彩なアップサイクルから、クリエイティブの可能性に魅了される刺激的な講習会となりました。

ハイブリッドドローイング演習 パンパステル講習会



6月20日、ホルベイン画材株式会社のご協力のもと、パンパステル講習会が行われました。新しい色材「パンパステル」は固形のパステルとは違い、パンの中に入った高品質のパステルです。講習会ではパンパステルのご紹介と使用方法を説明いただき、ワークシートを用いながら実際に描きました。パンパステルに初めて触れる学生が多い中、グラデーションやマスキング技法で描き方を工夫し、最後は画面いっぱいにモチーフを描く様子が伺えました。ドローイングセンターでもパンパステルを所有しているため、本学の学生は誰もが試用することができます。是非、新しい色材に触れ、自分の表現に取り入れていただきたいと思います。

ハイブリッドドローイング演習 プロアニメーターの世界 - 講評会・ワークショップ -

9月25日、株式会社Andraftによる「プロアニメーターの世界 - 講評会・ワークショップ -」が開催されました。講演会では、作業が細分化されるワークフローの仕組み、需要となり手のバランスが崩れている現在の課題など、アニメ業界のリアルな内容をお話いただき、講評会では、参加学生から事前に提出された課題作品を、スクリーンに映しながら感想とアドバイスをいただきました。パース感が大切なことや、身体



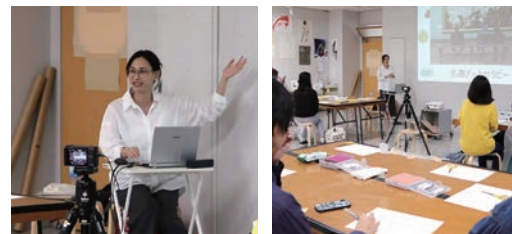
女子美術大学ドローイングセンター × 日本画材工業会 共同企画 「画材ヴィレッジ」第1回画材王決定戦



女子美祭期間中10月25日・26日、相模原キャンパスにて「画材ヴィレッジ」が開催されました。イベントでは、日本を代表する画材企業13社が参加する日本画材工業会がブースを設け、各所でワークショップを開催しました。また、画材にまつわる競技イベント「第1回画材王決定戦」が行われ、ブラインドキャンパス（目隠してキャンパスを持ち、サイズ・号数の早当て）、ラインマスター（好きな筆・絵具を選び、線の長さ・角度・美しさを競う）、混色王（指定された色を、制限時間内に混色し色をつくる）などたくさんの競技種目がイベントを盛り上げました。

ハイブリッドドローイング演習 美術治療（アートセラピー）ワークショップ

女子美祭期間中10月26日・27日、ホルベイン画材株式会社イム・アラムさんによる、「美術治療 アートセラピー」ワークショップが開催されました。アートセラピーとは、傷付いた心や弱くなった心を、美術の力を借りて健康な状態に戻す治療方法です。前半の講義の中で、イム先生はニキド・サンファルなどの有名な芸術家の名前を挙げながら、彼らが抱えていた心の傷を美術の力でどのように癒していたのか、具体例を交えつつお話しいただきました。ワークショップでは、喜怒哀楽を題材に、コラージュ、切り絵、クレヨン、絵の具等様々な画材で、自身の感情を表現する時間を体験しました。



ハイブリッドドローイング演習 コンセプトアーティストの世界 - 株式会社WACHAJACK 特別講演会 -



11月13日、株式会社ワコムのご協力のもと、株式会社WACHAJACKの代表である澤井富士彦さんによる特別講演会「コンセプトアーティストの世界」が開催されました。講演会では、会社の実績である作品を通して、コンセプトアーティストが担う仕事を詳しく解説いただき、現在制作進行中で2026年に公開予定の劇場アニメ「KILLTUBE」の、コンセプトや世の中に無い新しいものを生み出す取り組みについてお話しいただきました。講評会では参加学生から事前に提出された課題作品を、スクリーンに映しながら、アドバイスをいただきました。参加者の中には初めてデジタルで絵を描いた学生や、コンセプトを楽しんで考えることができた学生の様子が見られ、向上心が高まる有意義な講評会となりました。

共創デザイン学科 レジリエンスキャリアプログラム®

共創デザイン学科は、自身の強みとなるスキル教育に加え、折れない心やキャリアを高めるための教育にも力を入れています。学生のみならず、すでに社会の荒波に揉まれながら頑張る全ての女性たちを支援するため、社会人女性のための短期集中プログラム『レジリエンスキャリアプログラム®』を夏期と春期に実施しております。



デザインシンキングの型を 体験する5日間

トリプルデザイン株式会社の三上龍之先生によるデザインシンキング講座では、多様な領域の人々と共に新しい価値を創り出す思考法「デザインシンキング」の型を5日間で体験。受講者がグループワークで力を合わせ、課題発見から解決までのプロセスを思考しました。



社会人女性のための 「今さら聞けないビジネスのキホン」 講座

人材育成コンサルタントでキャリアアドバイザーの村山潤子先生によるビジネスのキホン講座では、上手に社会を渡るためのビジネスマナーの基本からコミュニケーションの方法まで、グループワークを通して、実践的なノウハウをご指導いただきました。



働く女性のための 「ブレない心」をつくる栄養学

分子栄養学・薬膳講師の鹿沼聡美先生による食講座では、社会で活躍するための心と身体の手台をつくるための「無理なく続けられる食べ方」の知識をご指導いただきました。また先生ご推薦のランチを食べながら、受講者同士が交流の輪を広げるネットワーキングサロンも実施されました。



明日から使えるクリエイティブ ファシリテーション講座

株式会社東芝の澤井香織先生によるクリエイティブファシリテーション講座では、情報を可視化し、参加者の意見を効果的に引き出すファシリテーション方法について、ワークショップを通じて、すぐ実践できるプロセスを体験しました。

ライフマネジメント講座（食）

スキルアップ講座

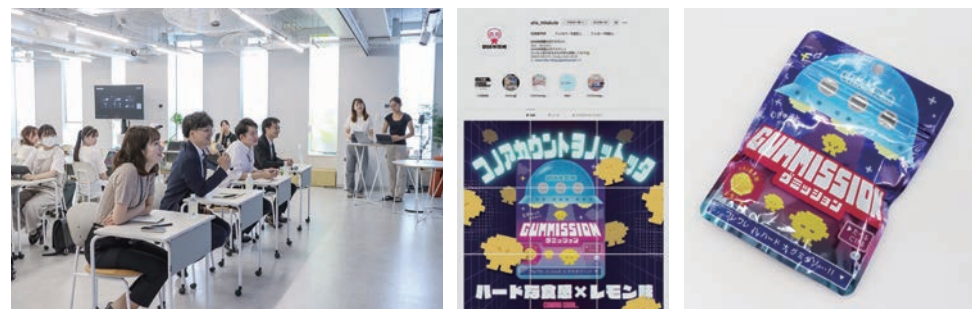
デザインシンキング講座

キャリアアップ講座

廃棄予定のモノをデザインの力でリメイクし、新たな価値を与え、ムダをなくす社会を作ることをコンセプトとしたリメイクブランド『enloop®』と本学共創デザイン学科のコラボレーションストアが有楽町マルイ2F concept shopsにて9月4日～10日の期間限定でオープン。廃棄予定の椅子の一部を使用し、マガジンラックやサイドテーブルといった全く異なるプロダクトへenloopデザイナーと本学共創デザイン学科の学生によって世界に一つの家具に生まれ変わらせました。夏季休暇期間中に、連携先企業・自治体でのデザイン、広報、企画などの業務体験を通して、社会に出るための心構え、スキルの強化、コミュニケーション力の強化を図る『産官学連携実践』授業の一環として実施。椅子の張替えや修繕を行う株式会社エフラボによる協力のもと、学生は実際に工場で修繕の方法を学んだ後、デザイン・制作及び価格の設定、販売までを体験しました。



2022年度に行われた全学科専攻の有志学生が参加した複数の産官学連携プロジェクトの中の、UHA味覚糖株式会社（以下、UHA味覚糖）との連携において、学生が企画・デザイン提案した新商品『グミッション』が、2024年9月30日より、全国のコンビニエンスストア等で発売されました。発売にあたり、新たな産学連携プロジェクトとして、本学共創デザイン学科の学生がSNS PRを担当しました。プロジェクトには5グループが参加し、それぞれがPR戦略を考え、UHA味覚糖の開発・マーケティングチームにプレゼンテーションを実施。採用された案が9月17日よりUHA味覚糖公式XおよびInstagramに投稿されました。UHA味覚糖の公式SNSが新商品のキャラクターである「レモン星人」に乗っ取られ、撃退するためにフォロワーの協力を仰ぐストーリーで、投稿文から掲載イラスト・アニメーション、キャンペーンまで、全て学生の提案を採用いただきました。



実写映画『ブルーピリオド』×女子美術大学 映画公開直前イベント



©山口ばさ／講談社 ©2024 映画「ブルーピリオド」製作委員会



8月1日(木)、杉並キャンパスにて

実写映画『ブルーピリオド』公開直前イベントを実施いたしました。

本イベントは、本学が映画の撮影ロケ地として使用されたことをきっかけに、真栄田郷敦さん、高橋文哉さん、板垣李光人さん、桜田ひよりさんの豪華キャスト陣が来校し、本学学生と交流を行いました。イベントは2部に渡って開催されました。

イベント第一部では、豪華キャスト陣と本学短期大学部造形学科美術コース所属の学生6名との共同制作を実施。今回のテーマである「青の渋谷」は、主人公である矢口八虎が美術の世界にのめりこみきっかけとなった、作品を象徴する絵です。同研究室教授の山本雄三先生の指導のもと、会話を交えながら、各々が真剣に目の前の絵と向き合い、様々な青が用いられた4メートルにもなる巨大な「青の渋谷」を皆で作りました。

げました。

イベント第二部では、本学付属生向けにトークショーを開催しました。サプライズで登場したキャスト陣の前に参加生徒は大興奮。第一部で制作した共同制作をお披露目したとき、驚きの声と拍手で会場が包まれました。トークショーでは共同制作の感想や本学での撮影を振り返るほか、付属生からの質問コーナーも実施しました。

参加をした学生・生徒にとって、役者界の第一線で活躍するキャスト陣と交流を深めた、大変貴重で有意義な1日となりました。

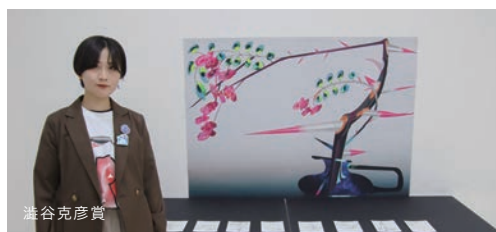
映画『ブルーピリオド』は好きなことに真剣に向き合う主人公たちの挑戦に、胸が熱くなる感動の物語となっており。一部シーンにて、本学が撮影ロケ地として使用されておりますので、ぜひご覧いただき、登場シーンを探してみてください。

スペース表現領域1期生 野外アート展へトロールの森2024へに出展



野外×アート×まちなか〈トロールの森2024〉出展作品 「Space Practice」
会期：2024年11月3日～11月23日 制作：石田綾乃、石塚けいと、王祐瑾、小西朱香、櫻井一葉、佐々木希彩、ザモラシジャーしきぶ、長尾風花
制作指導：西尾佳那、鈴木萌夏

本学芸術学部アート・デザイン表現学科スペース表現領域は2024年春に第一期生17名を迎え、空間美術・デザインについてのさまざまな授業がスタートしました。一年生の皆さんは学内の授業にとどまらず学外にも意欲的に活動の場を広げ、この11月には都立善福寺公園で毎年開催される国際野外アート展〈トロールの森2024〉に作品を出展しました。杉並区西荻窪の住宅地に豊かな水と緑を湛える善福寺公園は地域住民の憩いの場所です。この場所にスペース表現領域一期生8名が協力して、環境インスタレーション作品を制作しました。〈トロールの森2024〉の展覧会テーマは「風のにおい」ということで、スペース表現領域チームは五感で風を見るための「窓」をモチーフにした作品を提案・制作しました。



奥村 靱正賞

澁谷 克彦賞

客員教授 奥村靱正氏・澁谷克彦氏 特別講義開催

芸術学部デザイン・工芸学科ワイ
ジュアルデザイン専攻の学生を対象
に行われる、特別講義2024が
今年も開催されました。本講義は
客員教授の奥村靱正先生と澁谷克
彦先生よりテーマが出题され、それ
をもとにそれぞれが作品を制作し、
中間講評と最終講評を受けます。
10月26日に最終講評を女子美祭に
て一般公開しました。

今年このテーマは「レトロニム」。耳慣
れないテーマだからこそ自由に解釈
し、表現したグラフィック、映像、立
体作品など様々な作品が並びまし
た。講評は、テーマへの解釈や表現
方法、今後の制作にも繋がる助言
を一人一人にいただきました。最終
的に、奥村靱正賞、澁谷克彦賞が
贈られ、普段の授業とは違う緊張
感のある貴重な講義となりました。
また、参加した学生には、澁谷先生
がデザインした本講義のヴィジュア
ルをプリントしたTシャツがプレゼ
ントされ、互いを讃えあうように温
かく幕を閉じました。

宇宙・人間・アート

芸術学部 アート・デザイン表現学科では、広い視野でアートを考えていくことができる人材育成を行なっています。「宇宙・人間・アート」は、アートの活動を宇宙の視点から捉えてみることを目的にしています。各界の第一線でご活躍されている先生方を講師にお迎えし講演が行われました。その様子を一部ご紹介します。

萩尾望都 客員教授



本学研究所の内山博子特命教授との対談形式で行われ、萩尾先生の画業55年の創作の軌跡を辿っていきました。漫画を描き始めたきっかけから、デビュー当時の苦労話、そして漫画表現のテクニックま

で、貴重なエピソードが次々と披露されました。お話の後には、実際に漫画を出版社に持ち込んでいる学生や、親子で萩尾先生のファンである学生などからの多くの質問にお答えいただきました。

山崎直子 客員教授



講演では「宇宙とアートのつながり」をテーマに、山崎先生ご自身が宇宙で行った活動や、無重力空間での過ごし方について写真や映像とともにお話いただきました。また、無気質な宇宙ステーションで過ごす中で、植物の生育や、壁の温かみのある色合いが精神的な安定に影響を与えることについてもお話

しいいただきました。質疑応答では、「宇宙人についてどう思いますか」という学生からの質問に、「これだけ宇宙は広いので、絶対にいると思います。」と回答され、会場から驚きの声があがりました。学生だけでなく多くの聴講者が参加し、宇宙への夢が広がる素敵な講演会となりました。

ラルフ・グライスさんと イクムラレイコ先生の 特別講演を開催

5月28日に相模原キャンパスにて、ドイツのベルリン・アルテ国立美術館館長で次期オーストリア・アルベルティナ美術館の館長に就任するラルフ・グライスさん、本学大学院客員教授で画家のイクムラレイコ先生のお二人をお招きし特別講演が開催されました。

第一部では、ラルフ・グライスさんによる「可視化のための戦い 19世紀ドイツの女性芸術家の挑みとは」をテーマにお話しいただきました。19世紀以前の女性アーティストは、現在までほとんど名前が残っておらず、当時の女性アーティストの活動は否定的で偏見を持たれていたことなど、そんな時代にも臆することなく認知を広めた女性アーティストに焦点を当てた本講義は、本学の教育理念である「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」を彷彿とさせる内容でした。



第二部では、ラルフ・グライスさんとイクムラレイコ先生の対談形式で「2人が考える展覧会のビジョン」をテーマに講演いただきました。現在韓国で開催されている個展とオンラインで開催された個展をご紹介いただきながら、ラルフ・グライスさんと展覧会をつくることについて対話されました。対談を通して、海外で活躍されているお二人の姿は、芸術を学び将来を考える学生に気づきと勇気を与える講演会となりました。

客員教授 假屋崎省吾先生 特別講義 開催

本学短期大学部客員教授であり、華道家の假屋崎省吾先生による特別講義が、7月26日に杉並キャンパスにて開催されました。まず初めにいけばなのパフォーマンスが行われ、シャープな印象の花器を使用し、杉の一種であるコニファーと、花材にひまわりの花を使い、存在感と迫力のある作品を完成させました。その後スライドを使用した説明では、假屋崎先生×富士ゼロックス×女子美術大学のコラボで、

本学在学生在が富士ゼロックスの紙を用いて制作したバラを假屋崎先生が生けた経験についてお話しいただいたほか、これまで制作された作品の紹介として、いけばなの作品や個展、着物のデザインなどを、当時の写真とともに幅広くご紹介いただきました。在学生や教員、多くの聴講者が集まり最後は大きな拍手とともに特別講義は幕を下ろしました。



工藤麻紀子さんの講演会が開催されました

11月8日(金)に相模原キャンパスにて、画家の工藤麻紀子さん(本学芸術学部絵画科洋画専攻卒業)による講演会「今日は何かかも光って見える」が開催されました。講演会では、工藤さんのこれまで制作してきた作品とご自身の背景から、今回の講演会テーマにも関連する、「普段何気なく接するものでも、ある日突然輝いて見える瞬間、それを描きたい」という工藤さんの心情についてまで、様々お話し

いただきました。講演会には沢山の学生が集まり、最後の質問コーナーでは時間いっぱいまで質問が挙がりました。本イベント終了後には、洋画専攻3年生のアトリエ訪問をしていただき、学生の作品やポートフォリオを工藤さんに見ていただくなどの交流も行われました。学生にもファンの多い工藤麻紀子さんがとても温かな時間を過ごすごことが出来た1日となりました。



シンポジウム『美術と工芸「素材・色・音」から——SDGs時代の共通の感性——』

10月9日、相模原キャンパスにて、イギリスのバーミンガム・シティ大学(以下BCU)の先生方および粉体工学の先生と共に、本学の特色ある天然顔料研究のシンポジウムと研究成果展示「美術と工芸「素材・色・音」から——SDGs時代の共通の感性——」を開催いたしました。

本学では、2017年より先進的な顔料粉砕研究と繋げながら美術工

芸における天然顔料、色材の可能性を拡げることと目的とした海外協定校とのオンライン共同授業を行ってききました。

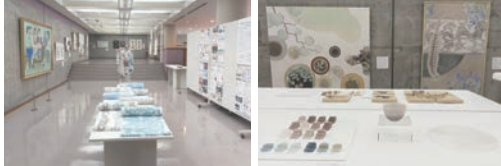
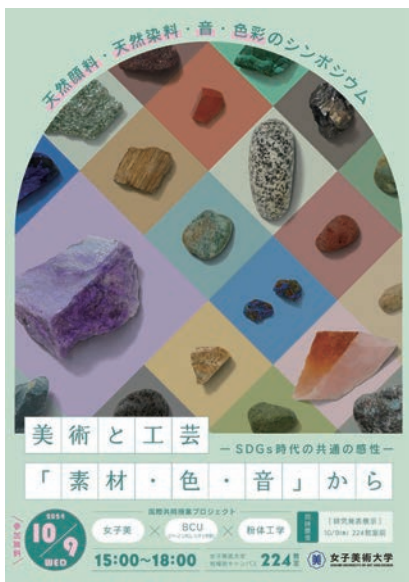
シンポジウムは3時間に渡り、8名の先生が講演されました。

今回のシンポジウムは、「見異なる分野でありそうな『美術と工芸「素材・色・音」を、「色」という事柄で集約しています。「色」を表現するものと

なる「物質」を、現代の粉砕・粉体技術を用いてサブミクロン粒子とする事は「天然顔料」をそれまで関連がなかった絵画以外の分野にまで発展してきました。その先駆的研究は、現代の生活に自然を取り込み、持続可能な社会のSDGs環境問題へも寄与できます。この研究は、女子美での分野横断研究、「二社」粉体工学会など関係団体との連携が生んだ今後も続

く本学の世界的な独創性を持つ研究成果です。

当日は、シンポジウムの他、BCUのLorna Rose先生による芸術文化専攻・洋画専攻の学生への特別講義や、内藤牧男先生、橋本弘安先生による対談を交えながら、リニエールされた本学の顔料創造ファクトリーの見学も行われました。





会期中、萬翠荘に隣接する喫茶「愛松亭」にて提供されるコーヒーやケーキの器にも学生作品が使用されました。

愛媛県知事への表敬訪問

びび美展 ARTS and CRAFTS MOVEMENT

—国指定重要文化財「萬翠荘」での工芸専攻4年生20名による有志展—

愛媛県松山市にある国指定重要文化財である「萬翠荘」にて、本学芸術学部デザイン・工芸学科工芸専攻5コース（染・織・刺繍・陶・ガラス）4年生の有志20名による展示が8月6日～8月25日の期間で開催されました。会場となった「萬翠荘」は、大正11年（1922年）、フランス・ルネッサンス風建築として旧松山藩主家の久松定謨伯爵によって建てられ、昭和天皇をはじめ多くの皇族方がお立ち寄り、ご宿泊にもなりました。

次世代の若者に萬翠荘を知ってもらい、新しい活用や表現を見出すための「萬翠荘アーツムーブメント」を目的に開催された本展。準備にあたっては、参加学生全員で印刷物のデザインや展示レイアウトを話し合い、萬翠荘との融合を考えました。

会期初日には、参加学生の代表者が愛媛県知事を表敬訪問し、本展に寄せる思いや普段の学生生活について紹介したのち、会場にてそれぞれの制作過程や作品コンセプトについて説明しました。

会期中は毎日ミーティングを重ね、普段触れることのない他コースの作品をお互いに学び合い、一人一人が全ての作品の解説や思いを来場者に伝えることができましたことは大きな学びの機会となりました。

あらゆるテキスタイルが飾られた部屋、窓から差し込む光に煌めくガラス作品など105点の現代工芸は、全館が工芸の塊のような萬翠荘と見事に調和して3700名を超える来場者を魅了しました。

JOSHIRIKITEN

女子美術大学
女子美術大学短期大学部

じょしりき
女子力展 2024

デザインフェスタギャラリー原宿
WEST館全館・EAST館全館

8.30(金) 13:00~19:00
8.31(土) 11:00~17:00
9.1(日) 11:00~16:00

GALLERY WEST
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 3-20-18
GALLERY EAST
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 3-20-2

TEL:03-5340-4500(大学代表)
EMAIL:joshirikiten@venus.joshibi.jp
HP:https://www.joshibi.ac.jp

X(旧Twitter)
Instagram



じょしりき 【女子力】展 2024

8月30日から9月1日までの3日間、「じょしりき【女子力】展」がデザインフェスタギャラリー原宿にて行われました。

じょしりき【女子力】展とは、女子美生が持つ「群れない・違いを認め合う・自由な・力強い・流行に流されない」をテーマに、杉並キャンパスと相模原キャンパスの両校地の学生が原宿のデザインフェスタギャラリーに集まり、

それぞれの思いを込めた作品を披露することができたイベントです。

作品展示の経験を通して他者・社会との繋がりを関係性を学ぶと共に、自身の「好き」なことをもつと「好き」に、このイベントに参加した全ての女子美生が、「好き」を確固たる自身の「力(自信)」に変えられるような機会にしてみようべく、7度目の開催へと至りました。

昨年に引き続き、学生による在廊のもと、およそ140の団体の女子美生が参加し、油絵や日本画の絵画作品と立体作品の展示やオークション販売、オリジナルのイラストやデザインで施したグッズ・アクセサリーの販売など、学生それぞれの個性が詰まった数々の作品が一同に会し、会場を訪れた人々を魅了する3日間となりました。

女子美クリエイティブ・ラボラトリーの取り組み

ミラノ研修・卒業生交流会



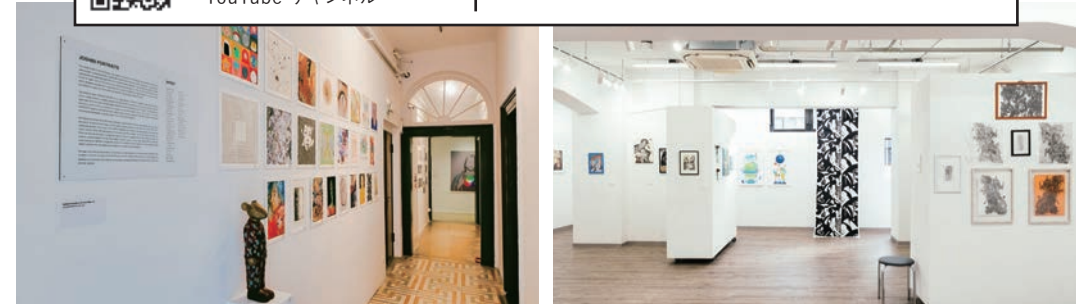
本学のミラノ夏期研修に参加した学生14名とイタリア・フランスで活躍する卒業生との交流会を女子美クリエイティブ・ラボラトリーが企画し、本年9月にヨーロッパ文化センターが所有するベネチアのパラッツォ・ミカエルにて開催いたしました。この交流会は学生のグローバルキャリア形成を支援し、卒業生のネットワークを強化することを目的としており、ロールモデル

を身近に感じることで、在学生の海外挑戦への意欲が高まり、「自分にもできるかもしれない」という前向きな姿勢が育成されます。現地では在学生による自身の作品を紹介するプレゼンテーションや卒業生との質疑応答を通じて、海外でのキャリアに関する実践的なアドバイスを得るとともに、国際的な視野を広げることができました。



女子美
クリエイティブ・ラボラトリー
YouTube チャンネル

JOSHIBI PORTRAITS



女子美クリエイティブ・ラボラトリー（以下、女子美ラボ）の活動の一環として企画している「JOSHIBI PORTRAITS」展では本学で学ぶ在学生たちがどのような世界を眺め、どのようなことを考えながら制作しているのかを社会に紹介する展覧会シリーズとして渋谷とベネチアの2会場にて開催しました。本展では在学生による95作品が揃い、女子美ラボの活動の根底にある

「アート・ジェンダー・教育」といったテーマに関連する内容が含まれる作品も多く見受けられ、あらゆる表現で自らを見つめ、「新たな自分の見え方」に触れることのできた展覧会になりました。渋谷会場では女子美ラボスタッフであり本学非常勤講師の長チノリ先生を迎え、ギャラリートークを実施し学生と対話形式で作品の所感や制作への姿勢などを話す貴重な機会となりました。

Personal Structures



ベネチアで開催された「Personal Structures」展では、女子美の理念や研究教育活動について世界に向けて発信する企画を2期に分けて展示しました。第1期では、女性美術家として本学卒業生である三岸節子氏の生い立ちに触れ、未だにアート界に残るジェンダーギャップについて焦点を当てながら、これまでの女性の美術教育にも言及しました。第2期では、女子

美の刺繍教育を中心に「女子美術大学における刺繍教育の歴史と日本における女子大学の現在」というテーマで、女子美がこれまで行ってきた芸術による女性の自立、専門の技術家・美術教師の養成の歴史について触れながら、2016年に本学に設立された染織文化資源研究所について取り上げ、過去と現在、そして未来の女子美について考える展示を行いました。

（企画：女子美クリエイティブ・ラボラトリー）



辻 真木子 Makiko Tsuji
女子美術大学研究所
講師（研究）
女子美アーティスト・イン・レジデンス
プログラムオフィサー

1991年生まれ。女子美術大学大学院美術研究科博士前期課程デザイン専攻アートプロデュース研究領域修了。都内のマイクロレジデンス「遊工房アートスペース」コーディネーター、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 トーキョーアーツアンドスペース（TOKAS）学芸員を経て現職。

皆さん、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）をご存知でしょうか？ アーティストやクリエイター、リサーチャーなどが普段の環境から離れたところ滞在しながら、制作やリサーチ、発表などができるプログラム、スペースのことです。アーティストが旅先で創作活動に集中できるように支援するシステムが世界中にたくさんあるのです。それがなんと2022年度から女子美に誕生！本学卒業生と海

外協定校の卒業生が対象の招聘プログラムをメインに、実験的に展開しています。開始2年目までは杉並で行なっていましたが、2024年度からは相模原キャンパス内にスタジオを新設して、活動中です。女子美には在学中から卒業後まで、国際的な活動をサポートする仕組みがたくさんありますので、ぜひ有効に活用してグローバルな活動を楽しんでください！



左:女子美術大学学長 小倉文子
右:フェリス女学院大学学長 小嶋山ルイ



フェリス女学院大学と女子美術大学は、教育研究活動の充実、教育の質的向上、及び人材の育成等に寄与することを目的とした連携協定を締結しました。女子教育を基盤とし、神奈川に拠点をもつ両大学の共通項を活かし、「ジェンダー」研究の発展や表現活動など革新的で実践的な教育成果の発信を目指します。11月7日、フェリス女学院大学（緑園キャンパス）にて協定式が執り行われました。

NEWS — & — TOPICS

「2025年日本国際博覧会 スタッフ用ユニフォーム」の デザイン公募にて優秀賞を受賞

2025年4月13日から10月13日まで開催される「2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）」にて会場サービスアテンダントスタッフが着用するユニフォームのデザイン募集が行なわれ、本学短期大学造形科衣服デザイン教室を卒業した服部真理子さんのデザインが優秀賞を受賞しました。受賞されたデザインは、来賓のアテンド、通訳、案内所等で働く会場サービスアテンダントスタッフのユニフォームデザインとして採用されます。

デザインコンセプト（大阪・関西万博公式WEBサイトより一部抜粋）

組み合わせが自由にでき、バリエーションのあるアイテムは働く人の事も大切に考え、寒暖差への対応や自分で組み合わせが選べ、かっこよく着られる工夫が出来る新しいユニフォームの形を表現しました。カラーは無彩色をベースに、世界共通認識できるSDGsカラーをインナーに起用しカラー展開を。カラーでも選べる自由もプラスしました。来場者の方々もカラフルに着こなされたユニフォームを見て希望や楽しさワクワク感を持ってもらえるはずです。



提供:2025年日本国際博覧会協会



JOSHIBI AIR
Instagram

JOSHIBI アーティスト・イン・レジデンス （JOSHIBI AIR）活動レポート

本学が2022年度より試験的に行っている、国内外で活躍する女性アーティストを招聘して創作活動を支援するプログラムです。大学の授業への参画やアーティストトーク、ワークショップなどを行い、活動の様子や成果を学生や教職員、地域の方々へ広く公開します。2024年度は9月より3ヶ月間、マレーネ・ラマーさん（オーストリア・ウィーン応用芸術大学卒業）と宮本華子さん（本学大学院美術研究科博士前期課程（洋画）修了）を招聘し、相模原キャンパスに新たに誕生したJOSHIBI AIRスタジオを拠点に活動を行いました。



9/10

宮本華子 両キャンパスにて 授業・講演会



12/4



9/20



10/11

マレーネ・ラマー 両キャンパスにて 授業・講演会



10/25 - 10/27

女子美祭
ガラスワークショップ・宮本座談室



11/6 - 11/8

宮本華子 個展
「出られずとも乗り。出られずとも漕ぐ。」



11/7

宮本華子 ワークショップ
「教えない絵画教室」



11/15 - 11/21

JOSHIBI AIR 紹介展
「女性アーティストが世界で活躍するために」



11/26 - 11/28



オープン・スタジオ



サントリー FROMFARMオンラインショップで発売中
<https://japan-wine.direct.suntory.co.jp/products/dab23n>

佐野ぬい名誉教授の代表作 「青の時間」がラベルデザインになった ワインが限定販売されています

本学名誉教授・元学長であり青森県弘前市名誉市民の佐野ぬい先生の代表作「青の時間」を、ラベルにあしらったワイン「サントリーFROMファーム 津軽ソーヴィニヨン・ブラン2023 佐野ぬいラベル」が5月7日から1200本限定で販売されています。ワインの完成にあたって、5月1日には弘前市民会館のスタンドグラス「青の時間」前にてお披露目会が執り行われました。



「CAF賞」にて本学在学生在が最優秀賞を受賞しました

「CAF賞2024」にて、本学大学院美術研究科美術専攻博士前期課程版画研究領域研究生の鈴木晴絵さんが最優秀賞を受賞しました。「CAF賞」は、学生の創作活動の支援と日本の現代芸術の振興を目的として開催している学生を対象としたアートアワードです。鈴木さんは「言葉の話をしない兄」をモチーフに、版画の連続性と自身の考え方を重ねて表現したインスタレーション作品を発表。受賞の感想を伺うと、「現代的なメディアの受賞作品が多いなか、オールドメディアである版画作品でこのような賞をいただけて驚きました。」とお話されていました。鈴木さんは副賞として個展開催の機会を得られ、2025年冬～2026年春頃に個展を開催する予定です。



<https://sommelier-wine.co.jp/supporting-future-artists/>

フランス大使公邸にて ワインボトル・アップサイクルプロジェクトの作品を発表しました

11月8日、本学工芸専攻の学生が、廃棄されるシャンパンボトルを花器に生まれ変わらせ、駐日フランス大使公邸で開催された「フランスナイト」にて作品を発表しました。「ワインボトル・アップサイクルプロジェクト」とは、世界16カ国のワインを輸入販売する株式会社ソムリエと本学デザイン・工芸学科工芸専攻ガラス分野の学生とのコラボレーションによる、アートとサステナビリティを融合させた取り組みで、今後はさら

に支援者を募りプロジェクトを拡大させていく予定です。会場では学生が来場者に作品の説明を行い、多くの感嘆の声が上がりました。当日は生花のアーティストによる装飾が施され、華やかな印象の展示となりました。展示中には多くの来場者から注目を集め、学生にとって、今後の制作の励みとなる貴重な経験となりました。

「ステス感謝Festival」のメイン ヴィジュアルを本学デザインルームの 学生が制作しました

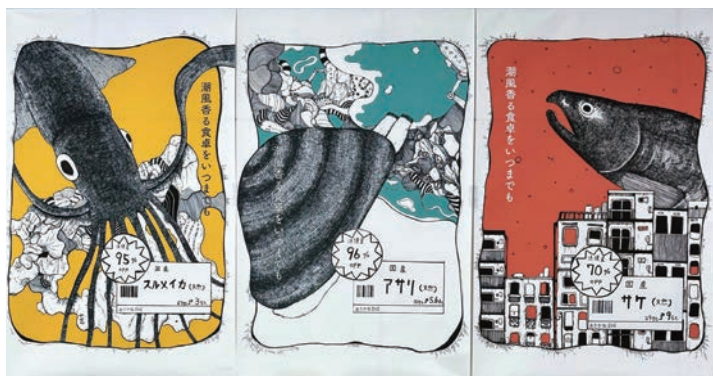
開業28周年を記念して相模大野ステーションスクエアにて開催される「ステス感謝Festival」。そのポスターなどで使用するヴィジュアル制作を、昨年に引き続き本学デザインルームの学生が協力しました。今年のメインヴィジュアルは、デザインルームの原田ひかるさんによる、同施設の3Fアトリウム広場をモチーフにした作品です。「ステス感謝Festival」は11月1日～11月30日の期間、コンサートや野菜の収穫などのおトクで楽しいイベントやキャンペーンが開催されました。



「なみすけ」が 杉並キャンパスに来校しました

杉並区の公式アニメキャラクター「なみすけ」が杉並区と区内にある5大学の情報誌『すぎ☆キャン!』取材のため杉並キャンパスに来校し、短期大学部造形学科美術コース、2年生と専攻科、研究生で立体造形を学ぶ学生へのインタビューが行われました。学生は「なみすけ」に自分の作品や制作テーマについて丁寧に説明し、「なみすけ」もダンボール彫刻に挑戦し学生がサポートするなど、楽しい時間を過ごしました。今回取材が行われた『すぎ☆キャン!』第7号は2025年春に発行される予定です。





10 | プロジェクト&コラボレーション演習 成果作品展示を行いました

この度、前期に実施された「プロジェクト&コラボレーション演習」授業の一環で行われた、水産研究・教育機構とのプロジェクトの成果が、学外にて発表されました。「プロジェクト&コラボレーション演習」は、本学の芸術学部アート・デザイン表現学科が他領域や、企業や他大学、地域などとコラボレーションを通して、実践力とコミュニケーション力を養う

授業です。成果作品のうち、学生2名の作品は2024年8月7日・8日には農林水産省が実施した「こども霞ヶ関デー」にて展示されました。また、10月1日～11月30日には栃木県日光市にある『さかなと森の観察園』の施設内「おさかな情報館」にて、プロジェクトに参加した学生作品（メディア表現領域、ヒーリング表現領域所属の学生）が全て展示されました。



08 | サイエンスコミュニケーション演習 2024年度作品展 東大 農学部 × 女子美 ヴィジュアルデザイン専攻

東京大学農学部と本学芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻とのコラボレーション授業の成果を展示した「サイエンスコミュニケーション演習 2024年度作品展」が相模原キャンパス Joshibi SPACE 1900にて開催されました。サイエンスコミュニケーション演習で

は、東大生（科学）と女子美生（表現）、それぞれ異なる分野でプロを目指す学生同士が相互のコミュニケーションを通して、若い世代に科学的な知識を伝えるための作品制作を行なっています。



11 | 第3回 日本で最も美しい村まつり 写真ポスター展

羽太謙一先生（元芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域教授、現本学名誉教授）の共同指導のもと、本学大学院美術研究科博士前期課程メディア研究領域、芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域、短期大学部造形学科デザインコースグラフィック

の参加学生が、NPO法人『日本で最も美しい村』連合北海道ブロック加盟9町村の魅力を伝えるべく、ポスターを制作しました。制作したポスターは、11月2日に東京ポートシティ竹芝で開催の「第3回 日本で最も美しい村まつり」にて展示されました。

09 | 「未来の交差点」に 短期大学部 造形学科 デザインコーステキスタイル研究室が 展示発表を行いました

11月1日～11月15日、若手クリエイター、そして企業を繋ぐ交流の場「未来の交差点」が東急プラザ銀座にて開催され、本学短期大学部からデザインコーステキスタイル卒業生3名の作品が出展されました。会場には参加した各校の学生作品展示や、クリエイターが出展するマーケットエリア、学生が企業に対しアイデアを披露し、ワークショップを行う場としてカタリ・バ エリアが設けられました。本学はイベント最終日にカタリ・バ エリアにて廃材の生地や糸からオリジナルの名刺を作る「未来の名刺でつながるワークショップ」を開催。若い世代のクリエイターと来場者が交流するシーンも多く見られ、新たな可能性が広がるイベントとなりました。



JAM

女子美術大学美術館コレクション展 生誕110年 郷倉和子 創作の根底

2024.5.22(水) - 6.22(土)

日本画家で女子美術大学名誉博士・郷倉和子の学生時代の課題や、院展出品のための習作、晩年のスケッチなど、創作を支えた作品や画材等の資料を紹介しました。

版画五美大展2024 ポートフォリオ版画集とアートブック展

2024.9.11(水) - 10.5(土)

東京五美術大学の版画研究室共同企画による展覧会。大学の垣根を超えた交流と版画教育研究の新しい展開を紹介しました。同時開催で女子美術大学図書館の貴重書コレクションも公開しました。

女子美術大学美術館コレクション公開 ※造形「さがみ風っ子展」同時開催

2024.10.25(金) - 10.27(日)

特別展示室で、岡田節子などの当館所蔵の美術作品と、女子美染織コレクションから秋を感じる小袖を特別公開しました。

女子美術大学美術館コレクション展 近年の新収蔵作品 ー女子美術大学美術館賞受賞作品を中心に

2024.7.3(水) - 8.6(火)

「女子美術大学美術館賞」を近年受賞した作品を中心に、日本画家・小関きみ子(1903-1984)をはじめとした本学卒業生や本学で教鞭をとられた教員作品、教育・研究のために収蔵した作品を加えて紹介しました。

第44回 造形「さがみ風っ子展」

2024.10.25(金) - 10.27(日)

相模原市内小中学生の造形作品展を開催しました。

女子美染織コレクション展 Part12 ヨーロッパの染織 Weaving Aesthetics 文様が織りなす美

2024.11.14(木) - 12.27(金)

女子美染織コレクションが有するヨーロッパの染織品のうち、特にルネサンス期やロココ期の裂(きれ)とその文様に焦点をあて、当時の高い技術力で織りなされた華やかな文様や衣裳類、服飾の変遷を紹介しました。

女子美ガレリアニケ

ニケキュレーターズセレクション#08 藤原宇希子 落ち、ただよう粒

2024.5.15(水) - 6.18(火)

本学卒業の若手アーティストを紹介する展示。本年は、藤原宇希子の作品を紹介しました。

女子美スピリッツ2024 継岡リツ展 神話 特別な時間 LaLaLa

2024.10.17(木) - 11.27(水)

1962年に本学芸術学部洋画科を卒業され、付属高等学校・中学校の校長を務めた継岡リツの無機的なものと有機的なものの融合で様式化された作品の数々を紹介しました。

女子美術大学短期大学部1年前期「基礎造形2024」展

2024.7.10(水) - 7.26(金)

短期大学部1年生が自由選択授業で制作した学生作品を展示しました。

歴史資料展示室

私は創りたい 井江春代展

2024.4.3(水) - 7.13(土)

1944年に女子美術専門学校師範科日本画部を卒業した美術家・井江春代の生涯を作品や関連資料とともに紹介しました。

JAM

2024年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2025.3.8(土) - 3.16(日) ※3.13(木)、14(金) 休館

2024年度に大学院博士前期課程を修了する学生の作品を展示します。

女子美の先達たちと女子美染織コレクション「春の装い」

2025.3.25(火) - 4.28(月)

女子美ガレリアニケ

女子美術大学 アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域 卒業制作・修了研究展 APILOGUE

2025.1.10(金) - 1.22(水) ※最終日は15時まで

アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生・大学院生による卒業・修了制作の作品を紹介します。

2024年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展

2025.3.8(土) - 3.16(日) ※3月13日(木)、14日(金) 休館

2024年度に大学院博士前期課程を修了する学生の作品を展示します。

歴史資料展示室

2024年度 新収蔵資料展

2024.9.11(水) - 2025.3.12(水) ※休室日 火・日・祝日、年末年始(12月28日~1月5日)

初代校長・藤田文蔵や第一期生・原千代の資料など、2023年度に収蔵した新資料を展示公開します。

JAM 女子美アートミュージアム展覧会情報

女子美術大学 美術館コレクション展 生誕110年 郷倉和子 創作の根底

2024.5.22(水) - 6.22(土)

日本画家・郷倉和子(1914-2016)は、1935年に女子美術専門学校(現・女子美術大学)を首席で卒業しました。翌年の第23回院展で初入選し、以後院展を中心に活躍を続けて2002年に文化功労者、2003年には女子美術大学名誉博士を授与されました。

当館は、2020年度および2023年度にご遺族から多数の

作品と関連資料をご寄贈いただきました。郷倉の生誕110年を記念して開催した本展では、完成画に加えて女子美在学時から晩年までのスケッチや下図、画材や道具などの資料を初めてまとまった形で公開し、郷倉の80余年にわたる創作活動を支えた日々の観察や研究の道程をご覧いただきました。



女子美染織コレクション展 Part12 ヨーロッパの染織 Weaving Aesthetics 文様が織りなす美

2024.11.14(木) - 12.27(金)

本展は、女子美染織コレクションが有するヨーロッパの染織品のうち、特にルネサンス期やロココ期の裂(きれ)とその文様に焦点をあてた展覧会です。ルネサンス期にはベルシャの織物がイタリアに伝わり、東方由来のザクロ文様などが流行。当時の絵画作品の中にもその文様身にまつた人物像を見つけることができます。動植物や人物、時に建築物や船なども表すモチーフは、時代

によって変化しながら、服飾や調度品を華やかに彩ったと考えられます。こうした裂が使われていた時代の服飾の変遷をたどる衣裳類や、扇・バッグなどの小物、展示品の文様を取り入れた人物イラストを展示することで、現在は断片となっている染織品が本来はどのような姿だったのかをイメージしながらご覧いただける展覧会となりました。



女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 総務企画部広報グループ
監修担当 佐藤真澄・松山智一
デザイン協力 株式会社 Kitchen Sink.
印刷 株式会社ヒーローズ
発行日 2025年1月29日
© 2025 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshi.ac.jp
URL <https://www.joshi.ac.jp/>